

日本を再生する名誉の復権

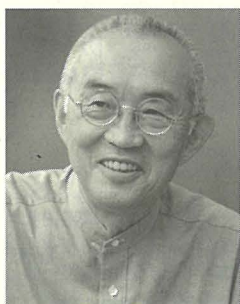
東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

お雇い外国人を魅了した日本

明治政府による「殖産興業」「文明開化」「富国強兵」などの言葉に象徴される政策は、短期で日本を世界有数の工業国家とすることに成功した。その成功の一因は、海外から高給で招聘した技師や教師など「お雇い外国人」であった。延べ八〇〇〇人以上にもなる人々の水準は玉石

混淆であつたにしても、産業革命の盛期にあつた欧米先進諸国との格差を一気に解消し、農業国家から工業国家への転換に多大な貢献をしたことは確実である。

その一人にヘンリー・ダイアーというスコットランド人技術者がいる。当時の産業技術の分野では世界最高水準であつたグラスゴー大学を卒業した直後、恩師で高名な物理学



者ウイリアム・ランキン教授の推挙により、二四歳で日本の工学教育のため、明治六年（一八七三年）に赴任してきた。最大の功績は東京大学工学部の前身である工部省工學寮の創設に尽力し、校長として日本の産

業の中核となる人々を育成したことである。

グラスゴー大学では、帰国してから明治政府で工部卿となる山尾庸三と同級であつたから、日本についての知識はあつたにしても、ダイアーは「地球の裏側にある未開の島国に赴任する」という心境であつたと推察される。ところが教育を開始してみると、建築の辰野金吾、化学の高峰譲吉、土木の田辺朔郎など有為の人物が次々と巣立つ日本に魅せられ、期間を延長して足掛け九年も滞在し、スコットランドに帰国した。

日本を変革した概念「名誉」

帰国してから、なぜ日本の生徒が優秀で、しかも欧米諸国が百年もかけて達成した産業革命を、日本は三〇年足らずで実現したかを研究することに集中し、一九〇四年に『大日本・東洋の英国』という題名の大部の著書を発表する。それは日本の教育、産業、軍事、行政、財政などについて統計数字とともに詳述し、明治時代の日本の百科事典とも言うべき内容であるが、最大の関心は日本

の急速な発展の原因を見極めることであつた。

日本で実感した気持ちを表現する回答を、ダイアーは新渡戸稲造が一九〇〇年に英文で出版した『武士道』に見出し、以下のように引用している。「明治維新を推進する力となつたのは、物質資源の開発と富の増進が動機だつたわけではない。ましてや西欧の習慣の闇雲な模倣を求めていることでもなかつた。何より劣等国として見下されることは耐えがたいという名誉を重んじる気持ち、それが最大の動機だつたのである」。

ここから五〇年弱飛躍し、日米開戦となつて、日本民族の精神構造の解明をアメリカ軍部に要求された人類学者ルース・ベネディクトは、一九四六年に名著『菊と刀』を出版する。その中核になる結論はあまりにも有名であるが、西欧諸国の「罪の文化」に対比して、日本は「恥の文化」というものである。名誉を毀損されるのが恥とすれば、二人の結論は同一の内容になる。名誉こそ、日本民族の精神の根底をなす概念なのである。

名誉を忘却した現代

すでに察知しておられるように、現在の日本の混迷は、あらゆる階層の人々が名誉という概念を喪失していることに起因する。問責決議にもかかわらず居座る大臣、訓告処分にもかかわらず復職する官僚、粉飾決算にもかかわらず居直る重役。善悪はともかくとして、かつてであれば切腹によって名誉を回復するような事態が、現在では何事もないように社会に氾濫し、忘却されていく。ダイアーでなくても理解できない時代になつている。

政権交代とともに「平成維新」という言葉が頻繁に使用され、現在は明治維新に匹敵する巨大な変革の時代とされる。その対比は的確としても、両者の決定的違いがここにある。トム・クルーズの製作・主演による名作『ラスト・サムライ』の冒頭の言葉が、見事に平成維新の課題の深奥を指摘している。「日本をつくつたのはひと握りの勇者たちである。彼らが命懸けで守つたものは、今では忘れられつつある『名誉』であつた」。

絶賛発売中!!
詳細は34頁を。巻末ハガキ
でご注文いただけます

